カミになる王――思想史の視点から――

桂島宣弘

大会委員会を代表して、今年度のシンポジウムの趣旨説明を行いたいと思います。初めに、東日本大震災で被災された皆様に心よりお見舞いを申し上げ、とりわけ被災しながらも学会事務局として本大会の準備に当たられた東北大学日本思想史研究室、及びこれを支えてこられた大会準備委員会の学習院大学の皆様には、敬意と感謝の意を表したいと思います。

さて、今年度のシンポジウムでは、中世～近世日本の王権が神権性をまとい、それを宗教的に表象していく構造について思想史的に検討したいと思います。いうまでもなく、「カミとしての王」あるいは「祭司王」は、世界史的な広がりをもつ観念であり、それぞれの地域・帝国の宗教的・思想的構造に規定されながら形成されてきた観念でありました。日本においても、たとえば邪馬台国時代の「シャーマン王」や古代律令制国家における建国神話、祭祀体系を挙げるまでもなく、有史以来王権は神権性と不可分の存在であったことは広く知られた事実です。天皇王権に関していえば、中世以降はその世俗的権力性が衰退していくにつれ、確かに祭祀体系の多くが中断に追い込まれていったとはいえ、その神権性が一定維持されてきたことは多くの研究が明らかにしているとおりです。というよりも、仏教・道教・儒教および神祇体系は、陰に陽に天皇王権と結びつき、

あるいはこれをそれぞれの歴史的段階に相応しいものとして解釈・弁証することで、その神権性を一貫して支える役割を果たしてきたといえます。顕密仏教と中世天皇制、あるいは近世仏教（寺檀体制）・神祇道と近世天皇制の関係は、そうしたものとして捉えられます。かくて、天皇王権は世俗的には衰退していったとはいえ、言説上は神権的存在として存続し、それが近代天皇制の現出の重要なイデオロギー的根拠となったと考えられます。

本シンポジウムでは、第一に中世天皇王権と顕密仏教の関係を、その即位灌頂儀礼のありように即して報告してもらいます。近年、中世天皇の「身体」が、顕密仏教、ことに真言宗や天台宗などの密教においてどのように解釈され、その世界観の中に位置づけられていったのかについて、新史料の発掘も含めて研究に大きな進展が見られるようになりました。ここでは、その代表的研究者の一人である松本郁代氏にご報告をお願いしました。中世における顕密仏教の解釈や儀礼体系は、その後も摂関家などの家職として伝習され幕末に至ったと考えられます。この意味では、中世天皇王権の即位灌頂や解釈体系を明らかにすることは、前近代天皇制の維持・再生産システムを思想史的に解明することにつながる重要なテーマであるといえます。また、中国や朝鮮など、東アジアにおける王権継承儀礼の広がりも射程に入れて捉えることも重要になってくると思われます。

一方、世俗的権力として存在してきた武家王権も、こうした天皇王権とはいわば「関係的存在」として存在していたことは、いうまでもありません。黒田俊雄氏が、中世権門体制を顕密仏教と相即的に定義づけたことを挙げるまでもなく、武家権門も天皇王権の神権性と補完し合いながら、その祭祀体系・儀礼体系を整備していったと考えられます。ことに、織田政権から徳川政権に至る過程では、「天下人」として自らを神格化することが精力的に行われました。注目すべきなのは、これらの神格化が近世以降のヒトガミ観念や諸思想の展開にも深刻な影響を与えたと考えられることです。とりわけ、「東照大権現」は、徳川王権の神権性の維持のみならず、それが広く在地まで及ぶことで、近世におけるヒトガミ観念の成立にも関与したといえます。ここでは、秀吉・家康の神格化の問題に明るい曽根原理氏に第二報告をお願いし、武家王権の神格化の思想的構造に迫りたいと思います。

第三に、王権の宗教性・神権性を受容する側、すなわち被支配者層・民衆における「カミとしての王」の受容の問題があります。この問題は、宮田登氏など民俗学では古くから議論がありましたが、思想史研究の分野では、近年ようやくにして進展が見られるようになったものです。ここでは、天皇が個々人の生と関係してくる思想の濫觴となった垂加神道に即しての検討を、前田勉氏にお願いしています。前田氏は、個々人が天皇とつながることで、国家とつながる思想を展開した点に垂加神道の画期性を捉えていますが、このことは、いうまでもなく近代以降の国家神道体制の展開、現人神観念の展開とつながる問題といえます。本大会では近代以降の問題について直接は取り上げていませんが、天皇をはじめ支配者をカミとして崇め、さらには一般の人びとをカミとして顕彰していく思想は、近代天皇制イデオロギーや、天皇神社、ヒトガミ神社、そして靖国神社などに、また、他方では、のちに教派神道として一括されるようになる民衆宗教のカミ観念、「生き神思想」とも関わるものであることは、明らかです。

以上、大会委員会としては、「カミとしての王」を日本思想史上において検討するための三つの軸を設定しました。古代における問題と近現代における問題を詳しく取り上げることはできませんでしたが、三者のご報告が近代以降の問題をも射程に入れていることは、先にのべてきたとおりです。ただし、念のため申しますと、近代あるいは現代の天皇祭祀や国家儀礼体系は、顕密仏教や神祇道と結びついてきた儀礼の多くを、大国派などの国学者のいう神道式に改変した上で構想されたものであり、この意味では、近代になって「創造」されたものであるということです。また、そこにキリスト教との対抗や、西洋式の儀礼の影響があることも、無視できません。しかしながら、それらが「伝統」として受けとめられ、あるいは個々人の生と結びつけて考えられたこと、さらには人をカミとして崇める慣習の上に立った創建神社・靖国神社が広汎に受容されるようになったことなどは、明らかに前近代に遡っての思想・観念・信仰の検討も要請しています。さらにいえば、戦後もそれらは「歴史的伝統」として受容され、天皇観のみならず、宗教観やカミ観にも作用を及ぼしているとするならば、「カミになる王」の前近代に遡っての思想史的解明は、天皇制や王権の問題に止まらず、現代にもつながる重いテーマであるといってよいと思います。

最後になりましたが、コメンテータとしては東京大学の島薗進氏、また、本号にはご寄稿いただけませんでしたが、学習院大学の赤坂憲雄氏にお引き受けいただきました。周知のように、島薗進氏は、宗教学・日本宗教史研究で多くの成果を挙げてこられた方ですが、近年は『国家神道と日本人』を発表され、国家神道の核としてこれまで皇室祭祀が取り上げて来られなかったという問題提起を行っています。本大会シンポに引きつけますと、それはまさしく王権中枢の論理や祭祀体系に対する研究の不備を指摘されているということであり、大会報告においてそれに対する一定の回答がなされているかどうか伺えれば幸いに思います。赤坂憲雄氏は、民俗学で大変有名な方であり、東北学を提唱されて、その確立に努めてこられ、今も東日本大震災の復興のためにご活躍中です。東北学と並んで、本大会シンポの核心部分、すなわち王がどのように王の「身体」を確立するのかを幅広い視点から解明してこられた方であることも周知のとおりであります。「カミになる王」というテーマは、これまでは民俗学が先駆的に研究を進めてきたといってよいと思いますが、大会当日は思想史学・文献学だけでは捉えきれない問題についてご指摘いただいたことも付言しておきます。

以上、簡単ではありますが、大会の趣旨説明としたいと思います。

（立命館大学教授）